

司式:増田多可子

奏楽:吉田千鶴子

前奏:「主イエス・キリストよ、われは定かに知れり」(0. ブクステフーデ)

招詞:希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。(ロマ5.5)

讚美歌:3「扉を開きて」

交読詩編 145. 1-9

(アルファベットによる詩)

01【賛美。ダビデの詩。】わたしの王、神よ、あなたをあがめ/世々限りなく御名をたたえます。

02 絶えることなくあなたをたたえ/世々限りなく御名を賛美します。

03 大いなる主、限りなく賛美される主/大きな御業は究めることもできません。

04 人々が、代々に御業をほめたたえ/力強い御業を告げ知らせますように。

05 あなたの輝き、栄光と威光/驚くべき御業の数々をわたしは歌います。

06 人々が恐るべき御力について語りますように。大きな御業をわたしは数え上げます。

07 人々が深い御恵みを語り継いで記念とし/救いの御業を喜び歌いますように。

08 主は恵みに富み、憐れみ深く/忍耐強く、慈しみに満ちておられます。

09 主はすべてのものに恵みを与え/造られたすべてのものを憐れんでくださいます。

#### 朗読聖書①イザヤ書 56. 6-8

◆異邦人の救い(後半)

06 また、主のもとに集って来た異邦人が/主に仕え、主の名を愛し、その僕となり/安息日を守り、それを汚すことなく/わたしの契約を固く守るなら

07 わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き/わたしの祈りの家の喜びの祝いに/連なることを許す。彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら/わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。

08 追い散らされたイスラエルを集める方/主なる神は言われる/既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。

#### 朗読聖書②マタイによる福音書 9. 9-13

◆マタイを弟子にする

09 イエスはそのをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座しているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。

10 イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。

11 ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。

12 イエスはこれ聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。

13 『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

#### 祈祷

天地万物を創造し、永遠に私たちを導き守ってくださる主イエス・キリストの父なる神さま、聖名を崇め賛美致します。聖霊降臨節、第19主日、神学校日、教会修養会一日目の朝、一人ひとりの名を呼んで教会へと呼び集め、またライブ配信を通して敬愛する兄弟姉妹と共に礼拝へと招いてくださり、共に御言葉を聞く恵みに感謝致します。

先の一週間を振り返り、神さまは人智を遥かに超えた私たち、あなたの御計画を歩む私たちを養い、導き、慰めの中にあつて、豊かに祝福してくださいました。それにも拘らず、神さまの御言葉に聞き従おうとせず、あなたの無償の愛に甘え、祈ることの少なかったことをどうぞお赦しください。私たちの歩みはあなたの御心に適ったものではなく、自分のことばかりを考え、隣人のことに関心を示さず、挙句に傷つけてばかりで、愛の業に程遠いものでした。神さま、どうぞ神さまの赦しの中に置かれていることに気づき、私たちの思いを遥かに超えたところに神さまの導きと支えが豊かにあることに気付かせてください。

神さま、あなたは礼拝の招いてくださり、悔い改めの機会をくださいました。そして御言葉を聞き、祈り、共に賛美することを赦されました。どうか一人ひとりの信仰を導き、信仰によって神さまの御旨に従う者とさせていただきます。

先の一週間を振り返りますと、世界は今なお多くの地域で紛争が続き、明日の食べ物、明日の命さえ危ぶまれている方々が多くおります。また、日本では気候変動を目の当たりにし、豊かな秋が秋でなくなりつつあります。また、理不尽な事故が毎日のように続き報道されています。事故によって巻き込まれ、一瞬にして愛する家族の命が失われ、悲しみの中にいる家族が多くいます。その方々お一人お一人の上に、あなたの大いなる慰めがありますように。

この礼拝を覚えつつも、この場に集うことのできない兄弟姉妹のために祈ります。家族、友人、知人、様々な困難の中にある友、深い悲しみの中にある友、失望の中にある友、その方々の上に、あなたの大いなる恵みが豊かにありますように。また、未だ信仰を告白されてない方々のために祈ります。その方お一人お一人が神さまの招きに応え、信仰告白し、一日でも早く教会の肢となりますように導いてください。

私たちは今日、100周年を迎えた後の第95回教会修養会を覚えております。この修養会は、本日この礼拝を以て始まり、今月26日に第2日目を迎えます。信濃町教会は100周年を迎え、新たな一歩を踏み出そうとする節目です。この修養会を通し、私たち一人ひとりがこの世へと派遣されている自覚をより一層強めてください。

世界各地で献げられている礼拝が、賛美と感謝に満ちたものとなりますように。御言葉を取り次ぐ御牧師の説教が聖霊の力を豊かに受けて力強く語られますように。また、聞く私たち一人ひとりの心を清め、素直に受け止めることができますように導いてください。

これらの祈り、尊き主、イエス・キリストの聖名によって御前にお届け致します。アーメン。

讚美歌 448:「お招きに応えました」

説教 「分け隔てなき神の招き」

佃 雅之

キリストが伝道の拠点とされたカファルナウムは、ガリラヤ湖の北側にある小さな国境に近い町です。国境には関税を取り立てる「収税所」が置かれています。そこに「マタイという」名の「徴税人」が「座って」いました。

「徴税人」は、当時、ローマ帝国の支配下にあったユダヤにおいて、民から税を取り立てる役目を担っていました。ユダヤ人にとってローマの支配下にあることは大きな屈辱でした。かつてダビデ王ソロモン王の時代に、輝

かしい王国を立て上げた神に選ばれた民だという誇りがあった。しかし今はローマに支配され、税金をむしり取られている。そのローマの手先になっているのが「徴税人」です。しかも彼らは決められた分の税金をローマに収めさえすれば、その上に自分の取り分を好きなだけ上乗せすることができました。「徴税人」は、謂わばローマ帝国に仕える裏切り者で、激しく嫌われていました。

ユダヤ人から見れば、「異邦人」は汚れた者です。「徴税人」は汚れた者と関わる仕事をしてきたため、その「徴税人」もまた汚れていると見做され軽蔑されていたのです。同胞のユダヤ人たちから仲間外れにされていたのが「徴税人」です。「徴税人」という仕事は、心に迷いや葛藤を抱えていては勤まらない仕事でした。“どうせ私は神の民の一員どころか罪人だ。毛嫌いされても仕方がない。それでも、自分の方がよほど裕福に暮らしている。何とでも言ってくれ。”と開き直って、「収税所に座り込んでいたのがこの時の「マタイ」です。

この誰からも見向きもされない「徴税人マタイ」を見かけて突然声をかけた方がおられました。それは主イエス・キリストです。キリストはまさに罪を犯している真っ只中のマタイに、「『わたしに従いなさい』と言われました。『彼は立ち上がってイエスに従った』とあります。たった一言、「『わたしに従いなさい』と言われた』だけのキリストに、「徴税人マタイ」はなぜ「立ち上がり」、「従った」のでしょうか。

聖書は、キリストの思いもマタイの胸の内も、具体的な事は何も書いていません。私たちが知るべき事は、「徴税人」が、「罪人」が、キリストの弟子とされた。しかもその「マタイ」が『十二使徒』の一人に加えられたという事実です。“マタイはキリストに呼ばれた、だから立ち上がった”、それだけで充分なのです。

「立ち上がる」(ἀνίστημι)という言葉は、聖書の中では「復活」を意味する言葉です。つまり「マタイ」はこの瞬間、“キリストの言葉によって新しい命を与えられた”のです。“わたしに従いなさい”、この一言が「マタイ」の人生を根底から変えました。「マタイ」が「立ち上がった」ということは、“収税所から離れる決断をした”ということです。彼はまさに、“お金も権力や力も仕事も捨ててキリストに従う決断をした”のです。“すべてを主に委ねた”ということです。

「マタイ」の決断は非常に大きなものでした。それは“キリストの言葉には人の人生を根本から変える力がある”ということを示しています。“生き方の向きを変える”ことを聖書では『悔い改め(μετάνοια)』という言葉で表現します。人を悔い改めへと導くことは人間の努力や決意ではなく、神の御業、奇蹟の御業です。

キリストに従った「マタイ」が先ずしたことは、“キリストを必要としている人々を自分の家に招いて食事を共にする”ことでした。私たちが「家」(οἰκία)と聞いて思い起こすべき事は『教会』のことです。初代教会は、信者の家に集まって礼拝が献げられていました。ですから、「その家」と言うのは、『教会』のことを意味しています。

キリストが「罪人」とである彼らを積極的に、その「その家」に、『教会』に招かれるのは何故でしょうか。キリストは旧約聖書に示された神の言葉をここで実現されようとしています。今日は、福音書と共に『イザヤ書』が朗読されました。神はユダヤ人が最も忌み嫌っていた「異邦人」にさえ、「聖なるわたしの山」に入ることを赦されました。神の下に近づくための基準は、血筋でも地位でもありません。それは霊的なものであり、心の向きです。「わたし

の家」には分け隔てがありません。“ユダヤ人と異邦人とを分け隔てていた壁は取り除かれなければならない”、それが御心であることを告げています。神の目には、この時、“新しいキリストの教会”、“世のためにある教会”の姿がはっきりと見えているのです。私たちの教会は、この神の思いに適った姿を取って信濃町の地に立っているのでしょうか？ 全ての人の為に教会の扉が開かれているのでしょうか？

「家」と訳されている言葉(οἰκία/οἶκος)は、建物、場所のことだけではなく、もう一つ「家族」という意味もあります。“教会は主によって招かれ一つとされた神の家族”なのです。キリストは、その家に「罪人」を招き「食事」をされます。「食事」は人と人が命を分かち合う行為です。区別や差別がない、一切の分け隔てがないことを象徴的に表すのが「食事」なのです。

すると、そこに、「ファリサイ派の人たち」が現れて、「弟子たちに、『なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか』と言った。」とあります。聖書をよく読まれる人はファリサイ派をキリストの敵として見てしまいがちです。しかし彼らは「異邦人」の支配下という困難な時代の中で、神への信仰を守り、律法に従って生きようとした人々でした。だからこそ、彼らはキリストが「罪人」と「食事」をしていることが、どうしても理解できず、納得できなかったのです。自分たちが大切にしてきた、信じてきた教えを覆すようなキリストの言葉と行為を受け入れることができませんでした。彼らは律法を守ることに真剣で、正しさへの熱意を持っていました。しかし、その正しさは、いつの間にか「神の憐れみ」の心を見失わせ、形式的な正しさへと傾いてしまっていたようです。ここでのキリストと「ファリサイ派の人たち」とのやり取りは、マタイが所属していた教会の中で実際に起こったことだと言われています。マタイの教会の中には、この世の地位や評価による自分の価値を誇る者がいました。また、自分の信仰歴や聖書知識をひけらかす者もいました。その反対に、教会は本来、そのような所ではない、神は罪人や無学な者をも選ばれ、一切の分け隔てなく、全ての人を招いてくれていると信じる者たちがいたのです。

「ファリサイ派の人たち」の問いにキリストが応えられます。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」、人が医者を訪ねるのは自分が病を患っていることに気付いているからです。丈夫である、健康であると思っている人は医者の所には行きません。それと同じように、自分が正しい人であると考えている人はキリストの元へ行こうとはしないのです。自分が正しい、罪を犯していないと思いついでいる人は、キリストの招きを自分への招きとして聞き取ることができません。

キリストは更に神の御意思を解き明かされます。「『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』(ホセ 6:6)。「憐れみ」とは相手の苦しみ心に心を動かされて行動することを意味します。苦しむ人に寄り添い、支え、癒すことが「神の憐れみ」に生きる姿です。それはつまり、“キリストによる救いがあることを伝えること”です。“神のご計画、キリストの御言葉を分るように伝えること”、それが、真の「憐れみ」なのです。「憐れみ」は神との交わりを回復する力です。

人はしばしば自分の知恵や誠実さ、あるいは、自分の力に頼って生きようとします。しかしそれらは、時に私たちに誤った道へと導くこともあります。真の導きは、私たち自身の内にはなく、主なる神の御手の中にあるのです。私たちは、自分の弱さや罪深さに気づいていない時、つい他人を審き、正しさを振りかざしてしまいます。時に私たちは、自分の知恵を働かせて考え、主張し、正義を論じます。その時、私たちは往々にして、

隣人への「憐れみ」を忘れてしまいます。或る人や或る行為を非難することは簡単なことです。その人の立場に立ち、その人の痛みや苦しみに想いを寄せようとはしていません。しかし神は、キリストにおいて、私たちと同じ立場に立ち、痛みを共にしてくださるのです。

では、「いけにえ」とは何でしょうか。「いけにえ」を「神に献げる物」と考えるなら、律法を守る生活も、祈りも、献金も、奉仕も、広い意味では「いけにえ」と言えるかもしれません。しかし、「神はそれを求めない」とはっきりと告げます。「憐れみの心を失った者からのいけにえは一切むなし」からです。

旧約聖書には、自分の罪を清めるために、山羊を身代わりにして献げていた人間の行為が書かれています。自分の罪を他の存在に移して神殿に献げ、自分を清い者と見做すのです。けれども、山羊の立場になって考えてみたらどうでしょうか。山羊は、「私は何も悪いことはしてない」とは言うことができません。これは人間の世界でも同じようなことが起こります。罪を押しつけられ、弁明もできず、沈黙のうちに罪人とされてしまう。結果、その判断が、いつの間にか共同体の中で固定化してしまう。その瞬間、『差別』と『断絶』が生まれます。声高らかに自分の正しさを主張する人の前で、『罪人』とされた人は沈黙する以外はありません。沈黙の中では、その人は自分を「汚れた者、罪深き者」と感じ、存在そのものを否定するようになっていきます。そこにあるのは無力感です。一方で、正しさを主張する人は自分の正しさに酔いしれ、神を見失い、キリストに背を向けているのです。

しかし、ここでキリストが望まれていることは善悪の対立ではありません。どちらの側に立っていたとしても、「私たち一人ひとりが神の愛と光の中で生かされていることに気づいて欲しい」と願われているのです。

今、ここに集まっている私たちは全て神の招きを受けた者たちです。パウロの言葉なら、一人ひとりが、「キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々(1コリ1.2)」なのです。この真実を忘れる時、差別や分断が生まれます。「イスラエルが、「我々は神に選ばれた民だ」と思い上がってしまったように、人はキリストの言葉から離れると、「他人の痛みに鈍くなり、誰かを平気でいけにえにしてしまうことがある」のです。神の愛や憐れみを忘れたとき、私たちは他人の痛みに鈍くなり、自分の正しさや都合のために誰かを審き傷付けることさえ平気でしてしまいます。

キリストは、「行って学びなさい」と言われています。“誰かを「罪人」と決めつけて審く前に、聖書が何を語っているのかを深く知りなさい”、ということです。『イザヤ書』にあったように、神は一切の分け隔てなく全ての人を招いておられます。キリストは、“あなた方も、「わたしに従う」者となって、わたしの教えを聞いて行いなさい”と言われるのです。

キリストの言葉が続きます。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」「「罪人を招く」ということは、全ての人を招く」ということです。キリストが言われたことは、“自分の財産や名誉、能力を誇ったり、過大に評価することがあってはならない。それらを盾として他者を見下すことも、差別することも、開き直ることも、神の御心から遠ざかることだ”と言うことです。

人間は神さまではありません。私たちは“神さまの御手の中で生かされている、御手の中に置かれている”という安らぎを知る時、“他の人よりも自分が一段高くなりたい、自分は特別だ”と思う心から、自然と解き放たれて行きます。“主の御手に守られている”という確信は、競争や比較から私たちを自由してくれます。そしてキリストの愛に触れた時、私たちの内にあるエゴは静かに、

しかし確かに手放されていくのです。その時、私たちは神の子としての自由と喜びを味わうことができます。

罪人である自分を愛し、慈しんでくださる神の存在を知ってマタイはどんなに喜んだことでしょうか。全ての人は神の御前に罪人です。

キリストは、その罪の重さを私たちに知らせるために、一人、十字架の道を歩まれました。キリストの十字架を仰ぎ見た時に、私たちはこの世界にある歪みから解放され、差別を乗り越えて生きる者とされます。

今朝、主イエス・キリストは、私たち一人ひとりにも「わたしに従いなさい」と語りかけておられます。この招きの言葉は、まさに今の私たちに向けられています。主に従う者には、必ず新しい道が備えられています。主の呼びかけに応じて私たちも「立ち上がり」、キリストに従う道を歩みたいと願います。

お祈り致します。

聖なる神、あなたが私たちを招き、恵みの中で共に生きることを赦してください。その深い愛と憐れみに感謝致します。キリストを復活させて下さったあなたの御力によって、私たちがこの世にあるあらゆる隔ての壁を越えて、真の一致と愛の内に福音宣教の御業に参与することが出来ますように聖霊が導いてください。

主の聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:48「イエス、イエス」

献金・感謝(大川佐知子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

天の神さま。こうして私たち一人ひとり集められまして、礼拝の時が持てましたことを感謝致します。私たちは一人ひとり弱者です。そして、一人ひとりの心の中に差別、分断、そのようなものを抱えています。しかし神さまは、そのようなもので私たちに区別することなく、できなくても、夫々の生まれ、そして民族、そのようなものを全て取り払い、一人ひとりを招いてくださっています。今日の説教を通して、神さまが私たち一人ひとりを大きな愛で招いてくださることを改めて思いました。心より感謝致します。

私たちは、必要な物を与えられ、主の僕として生きることが赦されていることを感謝します。今、夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴を御前に献げます。どうぞ祝して、教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださった『主の祈り』を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌:91「神の恵みゆたに受け」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:修養会午後のプログラムへ

後奏:「主なる神よ、我らみな讃えまつる」(J.G. ワルター)